

# 英語において動詞枠付け表現が使われる時\*

## When Verb-Framed Expressions are Used in English

出 水 孝 典  
DEMIZU Takanori

### 1. はじめに

言語学者の間でよく知られているように、Talmy (2000: 221-225) は、移動事象の意味的な構成要素のうち、経路 (path) を含む中核的スキーマ (core schema) を、動詞が表すのか、動詞を取り巻く衛星 (satellite) と呼ばれる部分が表すのか、いずれがその言語に特徴的な表現方法なのかによって、世界の言語を二つに分類している。中核的スキーマを動詞が表現する言語は、動詞枠付け言語 (verb-framed languages) と呼ばれ、日本語・フランス語・スペイン語などが含まれる。一方、中核的スキーマを衛星によって表現する、英語・ドイツ語・ロシア語・中国語のような言語は、衛星枠付け言語 (satellite-framed languages) と呼ばれる。

このような枠付け性の違いは、それぞれの言語に特徴的な移動動詞の違いに反映される。Rappaport Hovav and Levin (1998: 101, 102)、Levin and Rappaport Hovav (2013: 52)、影山 (編) (2001: 48-49) などで示されているように、移動動詞は、(1a) のような移動の様態を指定する移動様態動詞 (verbs of manner of motion) と、(1b) のような移動の結果・方向を語彙化する有方向移動動詞 (verbs of directed motion) に二分される。

- (1) a. amble, crawl, hop, jog, limp, run, swim, walk, . . .

歩く, 歩む, 走る, 駆ける, 泳ぐ, はう, 飛ぶ, 滑る, ぶらつく, うろつく, さまよう, 急ぐ, 跳ねる, 跳ぶ

- b. arrive, come, enter, exit, fall, go, rise, . . .

進む, 行く, 来る, 着く, 向かう, 近づく, 入る, 上がる, 下がる, 降りる, 下る, 落

---

\*本稿の元になった内容の大半は、「英語における有方向動詞の存在意義を問う」というタイトルで、10年近く前に、英語語法文法学会第22回大会(2014年10月25日(土)、於: 摂南大学寝屋川キャンパス)で口頭発表したものである。それ以来、論文化していない状態であったが、出水(2018)以降の研究成果を踏まえた形でアップデートした次第である。口頭発表時やその後のやり取りでコメントを下さった方々には感謝申し上げます。特に Grice (1975) の公理の語彙選択に対する援用に関して重要なコメントを下さったり、相談に乗って下さったり、原稿を見て下さったりした龍谷大学の五十嵐海理氏、近畿大学の萩澤大輝氏、神戸学院大学同僚の前田宏太郎氏には名を記して感謝いたします。残された瑕疵や齟齬はいずれも筆者によるものです。

ちる, 戻る, 出る, 発つ, 去る, 通る, 過ぎる, 渡る, 横切る

(cf. Levin and Rappaport Hovav 2013: 52, 影山 (編) 2001: 48-49)

Talmy (2000: 27, 49) によると、英語タイプの言語では (1a) の移動様態動詞が常用されるのに対し、日本語タイプの言語では経路を移動と融合した (1b) のような動詞が多く見られるという。

冒頭で見たように、ある場所 (着点) への移動を表現する場合、着点への経路・方向が中核的スキーマの一部をなす。そこから、日本語のような動詞枠付け言語だと、経路 (中核的スキーマ) を語彙化した有方向移動動詞を用いて表すというのが、特徴的な表現法となる。着点を明示する必要がある場合は、修飾語によってそれをさらに敷衍する。また様態を明示する場合は、衛星の一種だと考えられる動詞を取り巻く修飾語 (例えば日本語の場合、移動様態動詞の連用形) によって表すが、実際には Talmy (2000: 49) で述べられているように、省略されることが多い。一方、英語のような衛星枠付け言語の場合、経路 (中核的スキーマ) は衛星と呼ばれる動詞を取り巻く要素によって表現し、動詞は移動様態を語彙化したものを用いる<sup>1)</sup>。その結果、移動様態動詞が経路句を伴った形式が頻用されることになる。以上のことから、それぞれのタイプの言語に多く見られる動詞の違いが生じているわけである。

「徒歩で部屋に入る」という同一の状況を、日本語と英語が、特徴的な形ではどのように言語化するのかを図示すると、次のようになる。

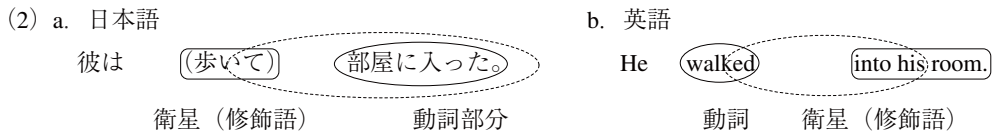


図1 日英語の移動表現の違い

しかしながら、(1b) に示されているように、英語にも一定数の有方向移動動詞があり、衛星枠付け言語である英語でも、(2) の状況を He entered his room. と、動詞枠付け言語である日本語同様の表現形式を用いて表すことが可能である。ではなぜこのような、本来の特徴的表現法とは異なるものが英語にも存在するのだろうか。

本稿では、有方向移動動詞を用いた動詞枠付け的な、英語本来の性向に合わないはずの表現法が、どのような場合にどうして英語で用いられるのかを考察していく。そして、英語において有方向移動動詞が用いられる場合と理由が、以下の2通りであることを明らかにする。

- (i) 移動様態が復元可能である場合→移動様態動詞+経路句を用いる際に必要な追加の操作が不要になるため

1) Talmy 自身は不変化詞のみが衛星であるとし、前置詞句を除外しているが、本稿では Beavers et al. (2010: 337-339) に従い、前置詞句全体を衛星だと考えて議論を進める。このように考える理由の詳細については、出水 (2018: 150) を参照されたい。

## (ii) 移動様態が不明の移動を表現する場合→移動様態が表現できないため

本稿の構成は以下の通りである。初めに2節で、(1) で見た移動動詞の分類を、意味要素の統語構造への写像という点から検討し、有方向移動動詞を用いるのではなく移動様態動詞+経路句を用いる場合には、非同型性を調整する付加的な仕組みが必要であることを確認する。続く3節では、移動様態動詞+経路句による表現と有方向移動動詞の表現の関係が、使役交替における使役形（他動詞形）と逆使役形<sup>2)</sup>（自動詞形）の関係と、関連する要素の位置付け、および含意関係という2つの点でどのように共通しているのかを見ていき、4節以降の分析の動機付けを行う。4節では Rappaport Hovav (2014) が使役交替における使役形（他動詞形）と逆使役形（自動詞形）の選択に関して提示している要因を紹介し、意味内容の少ない逆使役形（自動詞形）が用いられるのが、原因が復元可能な場合と話者に知られていない場合であることを確認する。5節では4節で使役交替に関して見た選択要因と同様のものが、移動様態動詞+経路句よりも有方向移動動詞を選択する場合にはたらくことを、Cambridge English Readers7冊から収集した有方向移動動詞 arrive と leave の実例を題材に用いて明らかにする。6節はまとめである。

## 2. 移動動詞の分類と写像の同型性

本節では、Talmy (2000) の提示する移動事象の意味的な構成要素とその構造を概観した上で、有方向移動動詞を用いた形式と移動様態動詞+経路句という形式を、統語への写像という点から比較し、前者に見られる意味と統語の同型性が後者には見られないこと、および後者の表現形式ではその非同型性を調整する仕組みが必要となることを見ていく。

まず、ある様態で、ある着点にいるという結果状態が生じる場合を考えてみよう。英語と日本語では、様態と結果状態が文のどのような要素によって表現されるかが異なっている。

(3) a.	Judy	<u>walked</u>	<u>to the park</u>	.	b.	Kim	<u>ran</u>	<u>into the room</u>	.
	意味	様態	結果状態				様態	結果状態	
	文法	動詞	修飾語				動詞	修飾語	
a'.	ジュディーは	<u>歩いて</u>	<u>公園へ行った。</u>		b'.	キムは	<u>走って</u>	<u>部屋に入った。</u>	
	意味	様態	結果状態				様態	結果状態	
	文法	従属節	動詞部分（主節）				従属節	動詞部分（主節）	

(出水 2018: 147)

図2 日英語の移動表現における統語的主従関係の違い

2) 「逆使役形」(anticausative) は「反使役形」と訳される場合もある。いずれにせよ、使役的な意味をもった他動詞が非他動詞化された結果、自動詞が生じるという派生の方向を示唆している用語である。

出水 (2018) では、これを以下のように説明している。

- (4) ふつう英語では様態を動詞、結果状態を前置詞句の修飾語で表しますが、日本語では様態を「連用形+て形」の従属節、結果状態を動詞とその修飾語からなる主節で表します。つまり、どちらを文の主要素（動詞や主節）としどちらを従属要素（修飾語や従属節）にするのかが、英語と日本語では逆になるのです。（出水 2018: 147）

このような日英語の違いがどのように生じるかを説明するために、Talmy は移動事象を構成する要素として、(5a) のような4つの主要構成要素と、(5b) のようなそれに付随する要素を想定している。

- (5) a. The basic Motion event consists of one object (the Figure) moving or located with respect to another object (the reference object or Ground). It is analyzed as having four components: besides Figure and Ground, there are Path and Motion. (Talmy 2000: 25)  
 (基本的な「移動」事象を構成するのは、ある物(「図」)が別の物(参照物、つまり「地」)に対して、移動するか位置付けられるかということであり、4つの構成要素からなると分析される。「図」「地」以外には、「経路」と「移動」がある)
- b. In addition to these internal components, a Motion event can be associated with an external Co-event that most often bears the relation of Manner or of Cause to it. (Talmy 2000: 26)  
 (これらの内在的構成要素に加えて、移動事象に結び付けられるものとして外在的共事象があり、その大半は内在的構成要素に対する「様態」や「原因」という関係を担当することが多い)

(5a) で4つの構成要素(内在的構成要素)だとしていたものを、Talmy (2000: 217-219) では移動事象全体における主要事象だと考え、それが移動事象全体のあり方に枠をはめるようなはたらきをすることから枠付け事象(framing event)と名付けている。また、4つの主要構成要素のうち、経路のみか、あるいは地となる物と一緒にになった経路のいずれかが、最も重要な役割を果たしていると考えられるので、Talmy (2000: 218) ではこれを中核的スキーマ(core schema)と呼んでいる。一方、Talmy (2000: 220) は、(5b) の外在的事象のことを共事象(Co-event)と呼び、これらが枠付け事象を支援する役割を果たすもので、最もよく見られる要素は、原因と様態であると述べている。

以上から分かるのは、経路も様態も移動事象に含まれる要素であるが、経路が中核的で主、様態が支助的で従であるという意味的な主従関係が存在するということである。そして、Demizu (2015: 37-39)、出水 (2018: 147) が指摘するように、この主従関係を統語構造へどう写像するかに関して、移動様態動詞+経路句を用いるか、有方向移動動詞を用いるかで、違いが見られる。

動詞枠付け言語に特徴的な有方向移動動詞を用いた表現法では、意味的に主である中核的スキーマ

マが、統語的にも主要部をなす動詞によって表されることになる。また、意味的に従である様態は、統語的にも従である衛星によって表される。つまり、有方向移動動詞を用いると、意味的な主従関係が、統語にもそのまま反映された形、つまり同型的な写像 (isomorphic mapping) になる。ところが、衛星枠付け言語に特徴的な、移動様態動詞が経路を表す前置詞句を伴った形式では、意味的に主である中核のスキーマが、統語的には従である前置詞句 (衛星) によって表され、意味的に従である様態が統語的主要部である動詞へと言語化されることになる。従ってこの場合、意味的な主従関係が、統語構造では逆転しており、非同型的な写像が行われている。

以下でそれを具体的に見ていこう。出水 (2018: 148) では、(3) の移動表現における (5) で説明された構成要素を、以下のような表にまとめている。

表1 移動表現の構成要素の具体例

↑ 内	↓ 外		構成要素	(3a)	(3b)
		中心の4つの構成要素	図 (figure)	Judy, ジュディー	Kim, キム
			地 (ground)	the park, 公園	the room, 部屋
			経路 (path) = 結果状態	to the park, 公園へ行った	into the room, 部屋に入った
		移動 (motion)	walk, 行った	ran, 入った	
		外在的事象	様態 (manner)	walked, 歩いて	ran, 走って

これを図示すると以下のようなになる<sup>3)</sup>。

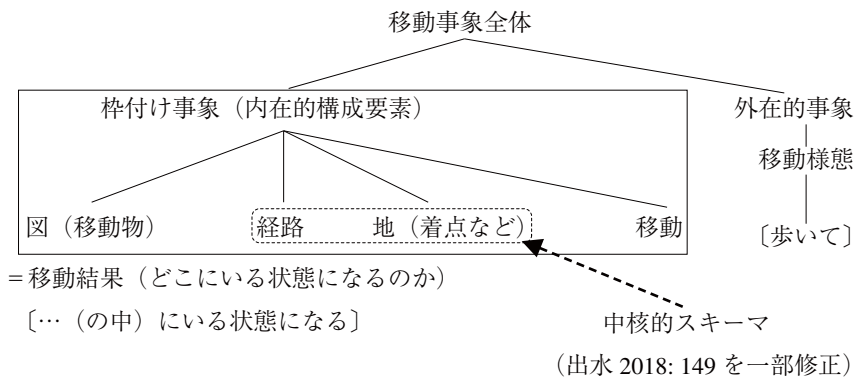


図3 移動事象の構成

このような移動事象が、日本語と英語でそれぞれどのように表わされるのかについて、出水 (2018: 153-154) が、(3a) Judy walked to the park. ((3a') 「ジュディーは歩いて公園へ行った」) を例に図解・説明している部分を概説する。

3) 図における [ ] はそれぞれの事象 (枠付け事象と外在的事象) を表わす。[ ] が2つ含まれるということは、移動事象全体が2つの事象から成り立っているということである。

日本語の場合、2つの事象として捉えられた移動結果（主要素）と移動様態（従属要素）が、以下に図示するように、その主従関係を保持したまま主節・従属節という2つの節からなる文の形で表現されることになる。

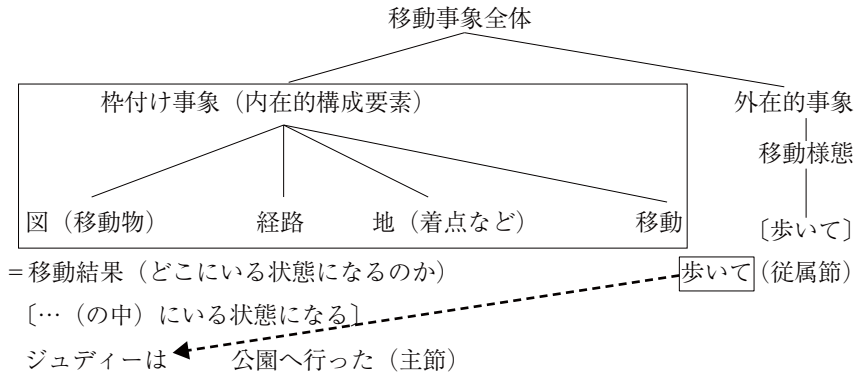


図4 「ジュディーは歩いて公園へ行った」の構成要素と文の対応関係

一方、英語の場合、意味的な主従関係と文構造上の主従関係が単純に入れ替わっているように見えるが、実際には事象の同一認定によって、事象スキーマに組み込まれる前に2つの事象が一体化していると考えられる。これは、ごく簡単に言うと、文構造によって表現される前の段階で、枠付け事象と外在的事象が一体化し、その一体化した事象全体が（主節・従属節に別個にではなく）1つの節によって表現されるということだ<sup>4)</sup>。

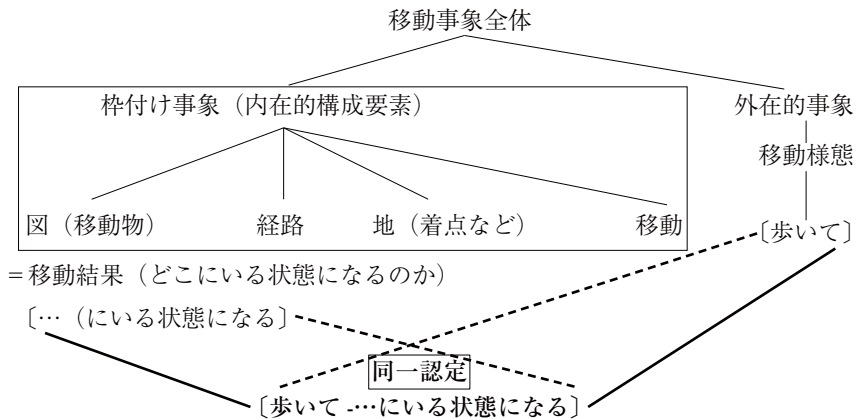


図5 Judy walked to the park. の構成要素と文の対応関係

日本語でこれをそのまま写像した「ジュディーは公園に歩いた」が不自然だということは、日本

4) ここでは [ ] でそれぞれ表わされていた枠付け事象と外在的事象が、Rappaport Hovav and Levin (2001: 782) が「事象の同一認定」(event coidentification) と呼ぶ仕組みによって、太字の [ ] で表わされる1つの事象へと合成されていると考えている。事象の同一認定の具体的仕組みについては、出水 (2018: 142-146)、およびそこで引用されている文献を参照のこと。

語、ひいては Talmy の言う動詞枠付け言語には事象の同一認定の仕組みが存在しないことを示していると結論付けることができる。そのため、動詞枠付け言語では、移動事象に含まれる各下位事象（枠付け事象と様態の外在的事象）を、主従関係を反映したままそれぞれの節へと写像していくことしかできないのだということである。

さて、ここで重要なのは、英語の *Judy walked to the park.* のような移動様態動詞＋経路を表す前置詞句という表現法は、有方向動詞を用いる場合に比べて、生成に事象の同一認定という仕組みの介在を必要とする分、追加的な労力がかかった表現法だということである。このような労力のかかった表現法は、確かに英語のような衛星枠付け言語では特徴的なものとも言えるが、様態を表現しないのなら、有方向移動動詞を使った動詞枠付けの表現法を用いることで、事象の同一認定の適用という労力をかけずに済ませることができる。以下では、そのような状況がどのような場合に見られるのかを考えていく。

### 3. 移動表現の使い分けの使役交替との共通点

本節では、英語において、特徴的な移動様態動詞＋経路句という表現法と、そうではない有方向移動動詞がどのように使い分けられるのかを説明していく足掛かりとして、使役交替との対照を行い、2つの共通点を明らかにする。

1つ目は、移動表現の使い分けに関わる様態と、使役交替に関連する原因が、Talmy の提示する移動事象内において、共に外在的共事象として位置付けられている点である。Rappaport Hovav (2014) は、*John broke the vase.* と *The vase broke.*、*The butler opened the door.* と *The door opened.* のような使役交替に対する新たなアプローチを示した論文である。かつて Levin and Rappaport Hovav (1995: 108-109) では、このような自他交替を説明するのに、基本となる他動詞の意味構造に含まれる原因の項を語彙的に束縛して自動詞を作るという語彙的なアプローチを取っていたが、Rappaport Hovav (2014: 21) ではそれを放棄し、内項のみを取る自動詞の方が基本で、それに対して文脈的要因によって、外的原因が主語（外項）として追加されるという見方を取っている。

- (6) I assume [...] that alternating verbs are lexically associated with the internal argument (s) only. I assume that English freely allows an external cause to be added to change of state verbs.

(Rappaport Hovav 2014: 21)

([使役] 交替する動詞が語彙的に結び付けられているのは内項のみだと [...] 私は仮定する。私がさらに仮定するのは、英語では状態変化動詞に外的原因を付加することが自由に許されるということだ)

この原因という意味要素は、2節の初めで少し触れたように、Talmy (2000: 220) で、様態と共に共事象に位置付けられている意味要素であり、Rappaport Hovav (2014) は原因の有無を自他交替（他動詞と自動詞の使い分け）に関連付けている。原因と様態のこうした共通点を踏まえると、同

様のアプローチを、様態の有無による移動様態動詞と有方向移動動詞の使い分けにも応用できると考えられるのではないか。

2つ目は、使い分けられる形式間に見られる含意関係である。Rappaport Hovav (2014: 22) によると、使役交替においては、John broke the vase. のような使役形 (causative) が、The vase broke. のような逆使役形 (anticausative) を含意する。そこからさらに、使役形が表すいかなる状況も、逆使役形によって表すことが可能であり、文脈によっていずれかが選択されるとしている。

- (7) [...] while the variants of the causative alternation are not truth-conditionally equivalent, there is a relation of entailment between them: the causative variant entails the corresponding anticausative variant. Put differently, any situation a causative variant can describe can be described truthfully by its anticausative counterpart. Since the two variants can in principle be used to describe the very same state of affairs, the question then does arise as to what variant is to be preferred in a given context. (Rappaport Hovav 2014: 22)

([…]) 使役交替のそれぞれの変化形は真理条件的に同値ではないが、それらの間には含意関係がある：使役形は対応する逆使役形を含意する。別の言い方をすれば、使役形が記述できるどんな状況であっても、それと対応する逆使役形による記述が「真理条件的に」真となる。これら2つの変化形は原則としてまったく同じ状況を表すのに使えるので、問題となるのは、ある文脈でどちらの変化形が好まれるかということだ

これは、与格交替に関わる文脈要因が広く考察されてきたことから、使役交替にもそれと同様の原理がはたらくという考え方に基づいている。一方、本稿で扱う移動様態動詞と有方向移動動詞の場合でも、Judy walked to the park. のような移動様態動詞+経路句の表現が Judy arrived at the park. という有方向移動動詞による表現を含意する。そのため、移動様態動詞+経路句が表すいかなる状況も、有方向移動動詞によって表すことが可能であり、(7) で述べられている使役交替の場合と同様に、文脈によっていずれかが選択されると考えることができる。

以上で見た、様態が原因と共に共事象の構成要素であること、使役交替と同じ含意関係が移動様態動詞+経路句と有方向移動動詞の間にも見られることの2点に基づき、本稿では Rappaport Hovav (2014) による使役交替の分析を、移動様態動詞と有方向移動動詞の使い分けに当てはめ、衛星枠付け言語である英語で、動詞枠付け的な有方向移動動詞が用いられる条件と理由について、考察を進めていく。

#### 4. 逆使役形（自動詞形）の使用を生じる要因

Rappaport Hovav (2014: 21) は、使役交替を生じる動詞に対して、本来的には内項のみと語彙的に関連づけられる自動詞の逆使役形 (The vase broke.) であり、原因を表す外項がそれに付加されることによって他動詞の使役形 (John broke the vase.) が作られるという見方を取っている。この



ような考え方に基づくと、他動詞の使役形というのは、原因を表現する必要がある場合に、わざわざ付加的な操作という労力をかけて作られる形だということになる。逆に言うと、原因を表現する必要がない場合、そのような労力をかけずに自動詞の逆使役形を用いる方がよいということである。そこから Rappaport Hovav (2014: 23-27) では、原因項を付加せずに自動詞の逆使役形が用いられる場合を、(i) 原因が復元可能 (recoverable) な場合と、(ii) 話者 (speaker) が原因を知らない場合に分け、前者を復元に関わる要素に基づいてさらに下位区分している。以下ではそれを順に見ていく。

#### 4.1. (i) 原因が復元可能 (recoverable) な場合

Rappaport Hovav (2014: 24-25) が、原因が復元可能であるため、原因項の付加が不要な逆使役形が用いられる 1 つ目のケースとして挙げているのは、(i-1) 原因が既定値 (default) として復元可能な場合である。これは次のように述べられている。

- (8) Many events of change have default causes: we might characterize these as changes which occur in the normal course of events. (Rappaport Hovav 2014: 23)  
 (多くの変件事象には、既定値の原因がある：我々はこれらを通常の事象の流れの中で [= 自然の成り行きで] 起こる変化であると特徴付けることができるだろう)

状態変化が自然の成り行きどおりに進む場合、通常の原因が既定値となっており、わざわざ原因項を付加して使役形を作って明示しなくてもよいので、逆使役形が用いられるということである。例えば、Her hair lengthened. 「彼女の髪が長くなった」という場合、新陳代謝によって髪が作られ頭皮の外に出てくるという通常の原因が既定値として存在するので、わざわざ原因項を付加して使役形を作るという操作は行わないわけである。Rappaport Hovav (2014: 24) によると、原因がこのような既定値から復元可能な場合に、わざわざ使役形を用いると、Grice (1975) の様態の公理 (the Maxim of Manner) (iii) の「冗長性を避けよ」(Avoid prolixity) に違反するので奇妙な文になるということである<sup>5), 6)</sup>。

一方、次のように、エクステンション (付け毛) を付けるという、通常以外の原因によって髪の毛が長くなる場合、原因項を主語として付加した使役形が用いられる。

- 
- 5) Rappaport Hovav (2014: 24) はこれを様態の公理の違反だと述べているが、量の公理 (the Maxim of Quantity) (ii) の「必要以上に多くの情報を提供しないこと」(Do not make your contribution more informative than is required.) だと考えることもできる。
- 6) 口頭発表時に近畿大学の吉田幸治氏より、そもそも Grice (1975) の一連の公理は、守っていると想定したりわざと破ったりして推意を導出するものであり、表現の選択要因に適用するのはおかしいのではないかという指摘を受け、五十嵐海理氏も同様のコメントを下された。ただ、Rappaport Hovav は表現の選択要因に適用できると考えており、古くは McCawley (1978: 247) もそのような見方を示唆してはいる。本稿では、このような場合、わざわざ使役形を用いることで、自明である使役部分をあえて明言して強調するようなふつうではない推意が出てしまうため、それを避ける目的で自動詞形を用いると考えておきたい。(10)、(12)–(14) で Grice (1975) の様態の公理、量の公理を援用している部分も同様である。

- (9) Stuart McPherson *lengthened her hair by six inches with human hair extensions.*

(*Tampa Bay Magazine*, 2008 March/April)

(スチュアート・マクファーソンは、人毛エクステンションで彼女の髪を6インチ長くした)

Rappaport Hovav (2014: 25-26) の挙げている、原因が復元可能な2つ目のケースは、(i-2) 原因が直前で言及されている (previously mentioned cause) 場合で、以下のように例示される。

- (10) I leaned against the door and *it opened*. (私がドアに寄りかかると、ドアが開いた)

(Rappaport Hovav 2014: 25)

この例では、私が寄りかかるという原因によって、結果的に私がドアを開けたことが表されているが、原因が直前の文で言及されているため、ドアが開く描写では逆使役形が用いられている。なお、Rappaport Hovav は明言していないが、このような場合も、原因項の付加を伴う使役形をわざわざ使って、少し前で明示されている原因を明示すると、1つ目のケース同様、様態の公理 (iii) 「冗長性を避けよ」か量の公理 (ii) 「必要以上に多くの情報を提供しないこと」の違反になってしまうと考えられる。

#### 4.2. (ii) 話者 (speaker) が原因を知らない場合

このような場合の例として Rappaport Hovav (2014: 26) が挙げているのは、これまで Fillmore (1998: 405), McCawley (1978: 246) などでも取り上げられてきた、アーネスト・ヘミングウェイの短編小説 'The Killers' 「殺し屋」冒頭の一文である。

- (11) *The door of Henry's lunch-room opened and two men came in.*

(ヘンリー食堂のドアが開いて、2人の男が入ってきた)

ここでは話者、つまりこの小説の語り手が、ヘンリー食堂の内部にいると考えられるため、外からドアを開けた殺し屋たちの姿を見ることができない。つまり誰がドアを開けたのかという、ドアが開いた原因を表す項の内容が不明であるため、それを付加した使役形を用いることができないのである。ここで使役形が避けられる理由を Rappaport Hovav は説明していないが、使役形を使ってよく分からない原因を明示すると、Grice (1975) の質の公理 (the Maxim of Quality) (ii) の「十分な証拠のないことを言わないこと」(Do not say that for which you lack adequate evidence.) に違反してしまうからだと考えられる。

### 5. 有方向動詞の使用を生じる要因

冒頭で砕付け性を概説した際に、衛星砕付け言語である英語では、He walked into the room. のよ

うな移動様態動詞＋経路句が特徴的な表現法であり、*He entered the room.* という有方向移動動詞による表現も可能だが、これはむしろ日本語のような動詞枠付け言語に特徴的な表現法で、英語においては例外的だということを確認した。

一方、2節で、有方向移動動詞の表現は、意味的な主従関係が統語的な主従関係に反映された同型的な写像であるのに対して、移動様態動詞＋経路句という表現は、意味と統語で主従関係が逆転しており、それを調整するため、事象の同一認定 (event coidentification) のような付加的な仕組みが必要であることを見た。

このような考え方に基づく、使役交替の場合と同様に、移動様態動詞＋経路句というのは、様態を表現する必要がある場合に、(使役交替での使役形の場合の、外項の付加と同様に) わざわざ事象の同一認定という付加的な操作・労力をかけて作られる形だということになる。逆に言うと、様態を表現する必要がない場合、そのような労力をかけずに有方向移動動詞を用いる方がよいということである。そこからさらに、Rappaport Hovav (2014) が使役交替に関して提示したアプローチを、移動様態動詞と有方向移動動詞の使い分けにも応用できる可能性が見えてくる。

以下では、Cambridge English Readers 7冊から収集した *arrive* と *leave* の用例をいくらか提示し、Rappaport Hovav (2014) が使役交替の説明に用いた、(i) 原因の復元可能性と (ii) 不可知性に基づく説明が、移動様態動詞と有方向移動動詞の使い分けにも援用できることを示していく<sup>7)</sup>。

### 5.1. (i) 様態が復元可能 (recoverable) な場合

使役交替の原因同様に、移動様態が復元可能な場合、事象の同一認定が不要な有方向移動動詞が用いられる。このような場合の1つ目のケースは、(i-1) 様態が既定値 (default) として復元可能な場合である。このような場合に、わざわざ事象の同一認定を伴う移動様態動詞＋経路句の形式を用いることは、使役交替の場合同様、様態の公理 (iii) 「冗長性を避けよ」か量の公理 (ii) 「必要以上に多くの情報を提供しないこと」にわざと違反して、その様態を特別に明示する必要があるという推意が出てしまうため、避けられるのだと考えられる。

まず動詞 *arrive* の例を見てみよう。ある乗り物で、あるいは急がなければならない状況で、移動が通常の成り行きどおりに進む場合、通常の様態が既定値となり、わざわざ事象の同一認定を行って移動様態動詞＋経路句を作って、様態を明示しなくてもよいので、有方向移動動詞が用いられる。これらでは話者 (語り手) の視点が着点にあり、そこからある乗り物や様子で人が「やってくる」ことが描写されている。

(12) a. Around six forty-five, Ellis Freeman arrived in a white van.

(6時45分頃、エリス・フリーマンが白いバンでやって来た。)

(Alan Battersby, *The Dark Side of the City*: 15)

b. But suddenly Latoya stopped breathing and her heart stopped beating. Immediately Shirley

7) 2節の説明では、英語の有方向移動動詞の例として *enter* を上げたが、*enter* は Cambridge English Readers の7冊から十分な数の例が収集できなかったため、代わりに *arrive* と *leave* を用いて議論する。

called for help. Other doctors and nurses quickly arrived with emergency equipment and medicines, but they could do nothing to save Latoya.

(Janet McGiffin, *Murder by Art*: 11)

(しかし、ラトーヤの呼吸が突然止まり、心臓の鼓動も止まった。すぐにシャーリーが助けを呼んだ。他の医師や看護師が緊急器具や医薬品を持って急いでやって来たが、ラトーヤを救う手立ては何もなかった)

(12a) では、バンに乗って移動しているが、バンを「運転して」(to drive) という通常の様態が既定値として存在するので、わざわざ事象の同一認定を行って移動様態動詞+経路句を作るという操作をおこなう必要はない。一方、(12b) では患者の容態が急変したので、急いで医者や看護師がやって来ている場面である。このような場合、「走って」(to run) という通常の様態が既定値として存在するので、事象の同一認定が不要な有方向移動動詞の arrive が用いられていると考えられる。

次に、動詞 leave の例を考えたい。以下の例では、出る際に用いた通路や出る場所を表す名詞が、出入りの様態を既定値として含んでいると考えられる<sup>8)</sup>。

(13) a. “I packed a bag, left by the back entrance, took a cab to Frank Van Zandt’s place.”

(Alan Battersby, *No Place to Hide*: 54)

(「バッグに荷物を詰め、裏口から出て、タクシーでフランク・ヴァン・ザントのところに向かったんだ」)

b. She left the apartment and went down in the elevator and out into the parking lot.

(Mandy Loader, *Eye of the Storm*: 21)

(彼女はアパートを出てエレベーターで下に降りて、駐車場に出た)

(13a) では、裏口を通して建物の外へ出る様子が描かれている。また、(13b) では玄関のドアを通過してアパートを出て、エレベーターで下に降りて駐車場に出る場面である。いずれもドアを通過して出る状況を表しているが、このような場合の通常の様態である「歩いて」(to walk) が既定値として想定されるので、わざわざ事象の同一認定を必要とする移動様態動詞+経路句の形式は用いられていないのだと説明できる。

様態が復元可能な2つ目のケースは、(i-2) 原因が直前で言及されている場合である。この場合も、わざわざ移動様態動詞+経路句の形式を用いると、様態の公理 (iii) 「冗長性を避けよ」か量の公理 (ii) 「必要以上に多くの情報を提供しないこと」の意図的違反となり、自明である様態を反復的に提示することで強調しているといった余計な推意が生じてしまう。

動詞 arrive で、話者(語り手)の視点が着点以外にあって、話者が移動し続け最終的にどこかに「着く」ことを描写する場合、直前の文脈で移動様態動詞が用いられることがある。そのような場

8) 有方向移動動詞の目的語や、それに続く前置詞句に含まれる名詞が、様態に関する意味情報を含んでいるという見方は、桃山学院大学の森下裕三氏の指摘による。

合、到着そのものを描写する段階では、様態が自明であるため、有方向移動動詞を用いている以下のような例が散見される。

- (14) a. I walked back to East 43rd Street. Stella was busy at the computer when I *arrived* at the office. (Alan Battersby, *High Life, Low Life*: 27)

(私は東 43 丁目まで歩いて戻った。事務所に着くとステラがコンピューターに向かって忙しそうにしていた)

- b. From Queens, Joe drove north across the East River to the Bronx. New snow on the road meant he had to go slowly. In the warm car I fell asleep for a time. Joe woke me as we *arrived* at the Grand Concourse. (Alan Battersby, *The Dark Side of the City*: 15)

(ジョーは車でクイーンズからイーストリバーを渡って北上し、ブロンクスへ向かった。道路には新雪が積もっていたため、ジョーはゆっくり走らなければならなかった。暖かい車内で私はしばらく眠ってしまった。グランド・コンコースに着くと、ジョーが私を起こした)

(14a) では、「歩いて」(to walk)、(14b) では「車で」(to drive) という様態によって、話者(語り手)の I や we がある場所に到着したことが表されているが、様態が先行文脈で言及されているため、到着そのものの描写では、事象の同一認定を必要とする移動様態動詞+経路句ではなく、有方向移動動詞が用いられている。

## 5.2. (ii) 話者 (speaker) が様態を知らない場合

次に、話者(語り手)の視点から移動の様態が見えないために、様態を明示した移動様態動詞+経路句の形式を用いることができないのだと考えられる例を見ていく。このような様態が不明な場合に移動様態動詞を用いることは、使役交替の場合と同じく、Grice (1975) の質の公理 (ii) 「十分な証拠のないことを言わないこと」の違反となるので、それによって何かの推意を生じさせる必要がある場合を除いて、避けられると考えられる<sup>9)</sup>。

まず動詞 arrive の例を見てみよう。このような場合、話者(語り手)の視点が着点にあり、着点を含む空間の外の移動が知覚不可能であるため、話者(語り手)には様態が分からない。そのため、有方向移動動詞の arrive が用いられるのだと考えられる。

- (15) a. ‘When did you *arrive* in the States?’ Martinez asked.

(Richard MacAndrew, *Strong Medicine*: 9)

(「いつアメリカにやって来たんだ?」とマルティネスが尋ねた)

9) 前田宏太郎氏より、この場合、Grice (1975) の関係(関連性)の公理の違反とも考えられるのではないかと指摘を受けたが、移動の様態を述べることそのものは、関連のないことではないので、ここでは質の公理 (ii) の違反だと考えたい。

- b. ‘It’s Jeff Mason—Janine’s friend,’ said the young man. ‘I have to talk to you.’ ‘OK Jeff, sure,’ I said. ‘Come over.’ I got up and took a shower. I tried to wake up, tried to forget Scott’s blood on the floor. The redness of it. I let the water fall over my body. It was warm and it felt good. Scott was dead, but the water felt good. Ten minutes later Jeff *arrived*. I went down to Reception to see him. (Sue Leather, *Dead Cold*: 24)

(「ジェフ・メイソンだ、ジャーニーンの友人の」と若い男性は言った。「話があるんだ」「わかった、ジェフ。うちに来てくれ」私は起き上がり、シャワーを浴びた。私は目を覚まそうとし、床に落ちたスコットの血を、その赤さを忘れようとした。お湯を体にかけて。温かくて気持ちよかった。スコットは死んだが、お湯は気持ちよかった。10分後、ジェフがやって来た。私はホテルのフロントに行って彼に会った)

(15a) は、相手にいつアメリカ合衆国にやって来たのか尋ねている場面だが、相手が到着したところを見ていない話者(話し手)は、その移動の様態(飛行機で来たのか、船で来たのかなど)を知ることができないので、移動様態動詞を用いることができない。(15b) は話者(話し手)の私が、ジェフ・メイソンと電話で会う約束をして、ジェフがホテルに会いにやって来る場面だが、シャワーを浴びて部屋にいた私は、おそらくホテルのフロントからジェフの到着を知らされて、ジェフに会いに降りていったのだろう。ジェフが到着したところを見ていない私には、その移動の様態(歩いてやって来たのか、タクシーで来たのかなど)が分からないので、有方向移動動詞が用いられている。

次に動詞 *leave* の例を見ていく。このような例では、話者(話し手)の視点が起点を含む広い漠然と表された空間の1点に置かれ、その空間すべてを話者(話し手)が知覚することができず、よって出た様態も知ることができないのだと考えられる。

- (16) a. “We’re going to help you *leave town* now,” I went on. “Seattle, San Francisco, I don’t mind where.” (Alan Battersby, *The Dark Side of the City*: 43)

(「今から街を出るのを手伝おう」と私は続けて言った。「シアトルでもサンフランシスコでも、どこでもいい」)

- b. ‘And how long have you been here?’ I asked. ‘Almost ten days,’ said Jeff. ‘We have to *leave* tomorrow. Classes start next week.’ (Sue Leather, *Dead Cold*: 18)

(「いつからここにいるんだ?」と私は尋ねた。「10日間ほどだ」とジェフは言った。「明日には出発しなければならない。来週から授業が始まるんだ」)

(16a) は、犯罪者に向かって、「この町を出て行け、シアトルでもサンフランシスコでもどこへでも行ってしまえ」と言っている場面である。ただ、話者(話し手)の視点からはアパートなどとは異なり、町全体を見ることはできないので、町を出て行く様態が話者(話し手)にとっては不明である。(16b) でも、話者(話し手)である私に、広大なスキーリゾートにどれくらい滞在している

のかを訊かれたジェフが、10日近くになると答えた後、来週授業があるので明日には帰ると言っている場面である。やはり広大な場所から出ていくわけなので、出て行く様態を話者（話し手）が知ることはできない。

## 6. おわりに

本稿では、衛星枠付け言語である英語で、特徴的表現法である移動様態動詞＋経路句ではなく、動詞枠付けの表現である有方向移動動詞が用いられるのは、(i) 様態が復元可能 (recoverable) な場合、(ii) 様態が話者（語り手）にとって未知である場合、の2つであることを明らかにした。まず、2節で2つの表現法に見られる写像の同型性の違いを確認し、次に3節で2つの表現法と使役交替の共通点を2つ提示した。さらに4節で Rappaport Hovav (2014) が使役交替に対して提示する表現の選択要因を概観した。それを踏まえて5節で、英語であえて有方向移動動詞が選択される場合の要因を明らかにした。

英語において有方向移動動詞が用いられる場合というのは、結局2つあったわけだが、この2つは用いられる動機付けが異なる。(i) の様態が復元可能な場合に有方向移動動詞を用いるのは、移動様態動詞＋経路句という表現を作るのに必要な付加的操作である事象の同一認定を不要にするためであり、これは Grice (1975) の様態の公理 (iii) 「冗長性を避けよ」か量の公理 (ii) 「必要以上に多くの情報を提供しないこと」に意図的に違反することで、余計な推意を導き出すことがないようにするためである。一方、(ii) の様態が話者（語り手）にとって未知である場合に有方向移動動詞を用いるのは、移動様態動詞を用いると Grice (1975) の質の公理 (ii) 「十分な証拠のないことを言わないこと」を守れないためである。

最後に、本稿では表現の選択要因として、(i) 復元可能性と (ii) 不可知性のみを挙げたが、実際には兎玉 (2013) が述べているように、その他の政治的・社会的要因がこの種の記述に関わっている可能性も大いにあると考えられる。

- (17) 一連の文は事態の状況・背景・事態の推移・因果関係・詳述・対比・並列など、多様な記述法に従って、あるいは何を語り何を語らないかについて個別社会の時代精神や言説の秩序に沿って展開する。展開の仕方は話し手がどのような意味世界を誰に向かって語るかによって違ってくる。  
(兎玉 2013: 96-97)

つまり、様態が自明でも不明でもないのに、あえて様態を語らずに有方向移動動詞を用いることで、ある種の情報を隠蔽したりすることも考えられるということである。ただしこれらに関しては、関わってくる要因があまりに複雑であると考えられるので、この種の語彙意味論的研究の射程に入れるべきかどうかには、議論の余地があるようにも思われる。

## 参考文献

- Beavers, John, Beth Levin and Shiao Wei Tham. (2010) "The typology of motion expressions revisited." *Journal of Linguistics* 46, 331-377.
- Demizu, Takanori. (2015) *Lexicalization Typology and Event Structure Templates: Toward Isomorphic Mapping between Macro-event and Syntactic Structures*. Tokyo: Kaitakusha.
- 出水孝典 (2018) 『動詞の意味を分解する』(開拓社 言語・文化選書 71) 東京: 開拓社.
- Fillmore, Charles J. (1998/1974) "Pragmatics and the Description of Discourse," In Asa Kasher ed., *Pragmatics: Critical Concepts, Volume V: Communication, Interaction and Discourse*, 385-407. London and New York: Routledge. (First published in *Berkeley Studies in Syntax and Semantics* 1, Department of Linguistics, University of California, Berkeley.)
- Grice, H. Paul (1975) "Logic and Conversation," In Peter Cole and Jerry L. Morgan eds., *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 22-40. New York: Academic Press.
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照－動詞の意味と構文』 東京: 大修館書店.
- 児玉徳美 (2013) 『ことばと意味』 東京: 開拓社.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2013) "Lexicalized Meaning and Manner/Result Complementarity." In Boban Arsenijević, Berit Gehrke and Rafael Marín. eds. *Studies in the Composition and Decomposition of Event Predicates*, 49-70. Dordrecht: Springer.
- McCawley, James D. (1978) "Conversational Implicature and the Lexicon." In Peter Cole ed., *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*, 245-259. San Diego, California: Academic Press.
- Rappaport Hovav, Malka (2014) "Lexical content and context: The causative alternation in English revisited." *Lingua* 141, 8-29.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) "Building Verb Meanings." In Miriam Butt and Wilhelm Geuder eds., *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, 97-134. Stanford, California: CSLI Publications.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An Event Structure Account of English Resultatives." *Language* 77, 766-797.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics: Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

## 用例出典

- Battersby, Alan (2001) *High Life, Low Life*. (Cambridge English Readers Level 4) Cambridge: Cambridge University Press.
- Battersby, Alan (2011) *No Place to Hide*. (Cambridge English Readers Level 3) Cambridge: Cambridge University Press.
- Battersby, Alan (2012) *The Dark Side of the City*. (Cambridge English Readers Level 2) Cambridge: Cambridge University Press.
- Leather, Sue (2006) *Dead Cold*. (Cambridge English Readers Level 2) Cambridge: Cambridge University Press.
- Loader, Mandy (2003) *Eye of the Storm*. (Cambridge English Readers Level 3) Cambridge: Cambridge University Press.
- MacAndrew, Richard (2006) *Strong Medicine*. (Cambridge English Readers Level 3) Cambridge: Cambridge University Press.
- McGiffin, Janet (2009) *Murder by Art*. (Cambridge English Readers Level 5) Cambridge: Cambridge University Press.